

国際リスクコミュニケーションとグローバル化の敗北者  
- Interuniversity の日本での機能

国際予防医学リスクマネジメント連盟理事長  
酒井 亮二

国際予防医学リスクマネジメント連盟(URMPM)は「地球安全(Earth safety)」を目標として世界の国際機関および世界的な指導力を有する大学・研究所の学会員から構成されています。去る7月15日には、URMPMの地球安全教育プロジェクトであるInteruniversity開校式を世界銀行の遠隔教育システムを借室して、東京-ロンドン-バンコックを中継し、対話チャンネルを試験しました。

学会設立の理由は、20世紀末から世界はリスク増大傾向にあり、その要因の1つとして技術革新および経済のグローバル化が伝統的な地域安全システムとうまく融合していない点です。

今日のリスク管理は1つの閉鎖集団だけで行う考え方が主流です。しかし、金融経営学ではリスク分散という考え方が生じています。リスク分散の考え方は古典的な重層型リスク管理方法とは異なっています。リスク分散は、複数の組織との連携システムによってリスク管理システムの効率を上げようとする考え方です。国際通信技術がこれを可能します。

複数の集団でリスク管理ネットワークを運営することは、運営と情報の効率化を上げる点で魅力的な方法です。しかし、この根底には、複数の組織が共通の目的意識を共有していることが前提になっています。複数の組織でのリスク管理システムを共有するには、組織、文化、社会階層などに存在する利害関係の調整がうまく機能していることが前提です。

ここに、経済社会の大航海時代が、新たな敗北者を地球規模で大量に産出していることに注目すべきです。日本ではそれが自殺者の増加となって現れています。犯罪医学によれば、敗北者は自殺という行動をとるだけではありません。大航海時代に対する憎悪という行動の選択枝もあります。このような背景からすれば、リスク分散型のリスク管理システムを構築することの問題の1つは、今日の経済労働社会が大量に産出してくる行動リスクを、リスク管理システム自体が解決することです。これらのリスクはグローバル化経済社会を出現させた産業界が解決しなくてはならない重要な課題です。

どのようなリスクが我々の内部で起きているのか(リスク同定)。どの程度そのリスクは世界の危機になっているのか(リスク評価)。どのような予防対策が有効か。これらがリスク管理の一般的なプロセスです。そのために、様々な文化と社会層との意見交換が重要な機能を有します。ここに、リスク管理システム自体が、開かれた社会との対話チャンネルを有していることが不可欠です。

国際予防医学リスクマネジメント連盟という世界学会も、世界の多様な文化からの会員を構成員とする巨大なリスク分散型管理システムですから、様々な対話チャンネルが必要です。日本からも、各界からの協同を促進しており、ご参加をよろしく申し上げます。